

ラグビーワールドカップ奮闘記

「ひたむきに ひとつひとつ心をこめて」

〜ジャパンと東大、相似図形の窓から見えたもの〜

2003年度ラグビー日本代表テクニカルスタッフ 村田祐造
プロローグ

「ジャパンと東大は同じなんですよ。強い相手に勝とうと思うなら、狂気じみた情熱とひたむきさが絶対必要なですよ。もっとチームが一つになってひたむきに泥臭くラグビーをやらなきゃ、そりゃ惨敗しますよ。そういう雰囲気は日本代表に作っていきましょうよ。」日本代表チームのテクニカル会議で私は力説した。アメリカ代表に続き、ロシア代表に惨敗した頃だ。

日本代表のふがない姿を、チームのために体を張らない何名かの選手が桜のジャージを着ているという事実を、そのチームのスタッフを自分もやっているのだから責任の一部は自分にもあるのだという事実を、私は許すことができなかった。「ジャパンがワールドカップで惨敗する姿は見たくない。このままじゃダメだ。なんとかしなくちゃ」私は考えていた。日本代表の問題点を考えているといつも東大ラグビー部のことが頭に浮かんだ。

「対面殺して俺も死ぬ!」

私が大学一年生のとき対抗戦で初めて21番のスイカをもらった早稲田戦のジャージ授与式。私が着たかった11番のスイカを手にした3年生の吉岡先輩が、泣きながら絶叫していた。

午後10時半、他に誰もいなくなったグラウンドに、黙々とプレースキックを繰り返す4年生の佐分利先輩がいた。先輩の足を離れたボールは、いつも正確に淡々と決まってしまう対抗戦での先輩のゴールキックと同じように、見慣れた軌跡を描いてバーの真ん中を越えていった。薄暗いイン

ゴールにはいくつもボールが転がっていた。「積み重ねた努力は裏切らない」次のボールを両手で丁寧に地面にセットする先輩の背中が教えてくれた。

意識朦朧となり泥だらけになって繰り返したガチョン（タックルとラックとセービングを延々と繰り返す練習。「ゲアチャー」と行けばいいんですよ。」と寺尾元監督が発案し命名）。日体大と青山学院大を破った2000年の東大ラグビー部。大芝と宋が率いていたあのチーム。ひたむきで泥臭い男達。努力と挑戦の日々。そんなスイカのラガーマン達の姿を思い出していた……。

起の巻

私が日本代表チームにテクニカルスタッフとして帯同し始めたのは、2002年9月、韓国の釜山で行われたアジア競技会からであった。私が大学院生時代から2年間かけて開発したラグビー映像分析統計ソフトPowerAnalysisが、ラグビー日本代表チームに公式に採用され、私はその開発者として日本代表チームのテクニカル（分析）スタッフに任命され、日本代表チームの一員となった。日の丸のプレザーを着て、他の競技の日本代表の選手達と開会式で行進したときは本当に誇らしい気持ちだった。

ラグビー映像分析統計ソフトPowerAnalysisは、統計データ作成と映像のデータベース化を同時に行ってしまうソフトだ。統計データを見ながら、そのデータの根拠になっている映像が見たいと思ったらすぐにその映像を次々に呼び出せる。ラインアウト、スクラム、キックオフ、タックル。次々に欲しいシーンを呼び出すことができる。「こんな道具があったらなー。」PowerAnalysisは、私が東大ラグビー部で偵察委員をやっていたときに感じたジレンマを解消するため、開発したラグビー分析ツールである。

大学2年生と3年生の時である。当時私は、なんとか上位校を倒してやる、1ミリでも勝利に近づきたいと相手校の分析に意欲を持っていた。偵察委員の梅原先輩や三笠先輩といっしょに、あーでもねー、こーでもねーと議論を重ねながら、VHSのビデオテープを何度も巻戻したり、早送りしたりしながら何時間もテレビ画面とにらめっこした。自分なりに工夫して記録シートを考案してみたりもした。なんとなく相手の傾向らしきものは見えてくるのだが、「じゃあどうすれば勝てるのか」がわからない。チームのみんなにそれを伝えて一緒に考えればいいのだが、それを説明してイメージを共有する手段がない。とりあえず相手の特徴を表現するために、特徴シーンを編集したビデオを作ろうとするが、どこにその映像があったかがすぐに探し出せない。また巻き戻して探す。どこだったっけ。たしかこの辺。ああこれじゃない。これでもない。ぐわーもう時間がない・・・。

最大限努力してみたものの、苦労した割にはチームに反映され結果に結びつくような予感も実感もなかった。大学4年のときは、卒業論文と両立するための忙しさもあり、「過去2年間の経験によると、相手の分析は大変な割にはそれほど役に立たない。それより自分のパフォーマンスを上げることが大事だ。」と開き直ってしまっていた。結局大学4年間、一度も上位校に勝利することなく卒業してした。自分なりにベストを尽くしたつもりだったので、そこに到る過程にはある程度満足していたが、結果には満足できなかった。少し後悔が残った。

大学4年の秋に三洋電機でラグビーをしないかと誘われ、当初の予定どおり大学院に進学するか社会人ラグビーに飛び込むか非常に悩んだが、結局、大学院に進学した。専攻は、環境海洋工学科の宮田秀明教授の研究室。アメリカズカップというヨットレースに挑戦する「ニッポンチャレンジ」の挑戦艇を設計する研究室である。私は、ラグビーを引退してレーシング

ヨットの設計プロジェクトに挑戦する道を選んだ。私の大学院1年目の役割は、計算流体力学(CFD)を使って船の舵やマストの設計をする事、模型実験で船の性能をテストすることだった。ラグビーにぶつけていたエネルギーをそのままこのプロジェクトに突っ込んで、死に物狂いで勉強した。大学院の2年目は、休学してニッポンチャレンジの契約エンジニアになった。ニュージーランドで行われたレースに帯同し、6ヶ月の海外生活を経験した。レース艇の電気系統のメンテナンスと海上実験のデータ分析が、ニッポンチャレンジでの私の仕事だった。科学技術を駆使してヨットレースというスポーツをサポートする仕事だった。全力で仕事をした。勝てると思っていた。しかし、ニッポンチャレンジは準決勝で敗退し、私の挑戦も終わった。

大学院3年目に復学した。修士論文のテーマは、レーシングヨットの設計法についてまとめる予定だったが、そんな気力はどこにも残ってなかった。もうヨットは無理だ。でも科学技術を駆使してスポーツをサポートする仕事についての研究を続けたいと思った。一番好きなラグビーを分析して戦略を考えるためのシステムを作りたい。私は修士論文のテーマを「勝ちたいスポーツ競技者のための意思決定支援ITシステムの構築」に変えてしまった。指導教官の宮田先生に激怒されてしまったけれど。三洋電機のラグビー部がまだ「ブランクはすぐ取り戻せる。大学院を卒業したら三洋でラグビーをやらないか」と誘ってくれたことも非常に有難かった。三洋で思いっきりラグビーをやりながら、仕事もラグビーの分析ソフトを開発したら、さぞ面白がるうと思った。大学生のときに味わったラグビーの分析の苦勞を生かして、ニッポンチャレンジで学んだ技術をもってすればきっといいものが出来ると確信していた。「いいのが出来たら、日本代表に売り込んでみよっかな」。そしたら今度のワールドカップに連れてって

らえたりして。うわー、楽しみ。」期待で心が躍った。「なんつっても俺、ラグビー好きだし。」

三洋の入社試験の面接では、ラグビー分析ソフトの開発の企画書を提出し、面接会場にパソコンとプロジェクトを持ち込んで私がどんな仕事をやりたいのかプレゼンした。希望通り、大学院で研究を始め、三洋電機でラグビー選手になり、業務で研究を続けた結果、完成したのがラグビー分析ソフトPowerAnalysisだ。

研究は、私の予感どおり2年後に日本代表に採用されて実用的にはある程度成功したと言えるのだが、1年で学術的にまとめるにはテーマが斬新すぎた。在学中には研究をまとめられず、三洋でラグビーに専念するため、大学院の修士課程を中退してしまった。修士論文は幻となった。自分では「まあしょうがねえや」と開き直ることができたが、学費を出し期待してくれていた両親には、本当に申し訳なかった。「大学院ではいろんな経験ができました。どうもありがとございました。中退となり学位はもらえませんがこの経験が無駄にはしません。これからの私を見ていてください。だから勘弁してください。」と両親に説明した。だから私は、この原稿を「私の修士論文」にして両親に捧げることにする。

承の巻

まだ在学中の大学院3年目の9月、私は観客席で絶叫していた。大芝生将率いる東大ラグビー部が日本体育大学に勝ったのである。涙があふれた。信じられなかった。本当に嬉しかった。

次の週、私は駒場の東大グラウンドに立っていた。大学院生として東大ラグビー部に復帰した。以前から大芝に「祐造さん。一緒にラグビーやりましょうよ。俺達には祐造さんが必要なんすよ。」と甘い言葉で口説かれていたのだが、修士論文の研究で多忙だったため断り続けていた。しかし、日

体大に勝っちゃうチームってどんなチームなんだろう」という好奇心と「こんなすごい奴らが必要だと言ってくれるなら、やってみよう。」という気持ちで、復帰してしまった。

「日体大に勝っちゃうチームってどんなチームなんだろう」

答えはすぐにでた。Bチームが試合の土曜日の午前中。Aチームがコンビネーションの練習をしていた。地域を想定してBKが球を動かし、FWがそれをサポートする練習だ。私はBチームの試合メンバーだったので、その練習を外から眺めていた。水上コーチの要請で早大OBの橋本氏が駒場に来てくれ、コーチして下さいさっているようだった。私は戦慄した

「おえ。おえー。」

コンビの最中にFWの選手が吐いていた。「22mスクラム！」選手達は指定されたポイントまで、よれよれの、しかし精一杯のジョギングで途中何度か吐きながら走った。橋本コーチの檄が飛んだ。

「いいかFW。『頑張る』っていうのはよー、最初の10mダッシュして最後の10mもダッシュするっていうことなんだよ。ポイントからポイントの移動はそういう気持ちで走るんだよ。それが、FWが『頑張る』ってことなんだよ。BKが最後トライしたときにはFW全員が塊でインゴールになだれ込むぐらい『頑張る』走ってみる！」

そしてまたコンビが再開される。BKは丁寧にボールをつなぐ。FWはひたむきにラックからラックまで『頑張る』走っていた。ウイングの藤井がインゴールにトライを決めると、その周りに少し遅れてFWの塊が倒れこむようにしてはたばたとなだれ込んだ。そしてまたインゴールで誰かが吐いた。「おえ。おえー。」

信じられない位、素直でひたむきな奴らだ。コーチの要求通りにやってみせる。すると、FWリーダーの宋選手が、リバースした直後の口を拭い

ながら、泣きながら狂ったように叫んだ。

「おい！お前らー！なんで俺のいうことはロクにきかねえのにコーチのいうことはそんなにきくんだよ。そうじゃねえだろー！練習はやらされてやるもんじゃねえだろー！」（コーチの方をにらみつけて）「あいつがなんだっつんだよ。」橋本コーチが宋を蹴り倒した。「うるせえ！」

壮絶だ。背中にヒヤリと汗が流れた。こんなひたむきなFW達にサポートされたら、BKは申し訳なくてミスなんか出来ない。そりゃもう、死に物狂いで球を生かすようになる。

数週間経って、私もAチームのコンビに参加するようになった頃である。当時私はウイングだった。私へのパスがワンバウンドした。低すぎて捕れそうになかったので、私は足にかけてドリブルした。ライン際だったのでボールは転がってタッチに出してしまった。そしたら宋がすっ飛んできて、「ボールが落ちたらセービングじゃねえのかよ！ゆうぞう！ふざけんな！」3歳年下の後輩から怒鳴られた。私は手刀を鼻先に出して頭を下げた。「わりい。その通りだ。」

ミスボールを相手に拾われると、こちらの陣形が崩れているケースが多いので、大ピンチを招く。逆に相手のミスボールを拾えば、大チャンスになる。ボールが落ちたらセービング。セットプレイで常に劣勢に立たされ、攻撃機会の少ない東大ラグビー部は、ミスからのピンチは最小に、相手のミスからのチャンスは最大にしなければならぬ。我々はそういうところまで体を張らなかつたら勝つ要素がなくなる。たとえそれが上級生でも、ゆうぞうでも、落ちたボールにセービングしない選手が一本目のすいかジャージを着る事は許さない。そんな迫力があつた。

練習後の風呂で宋に話しかけた。

村田 「おい宋。あんとき悪かつたな。セービング。俺、ボール落ちたら全部飛び込むよ。」

宋 「あー祐造さん。わかってますよ。僕の方こそ熱くなっちゃってますいません。」（と屈託なく笑う。）

いい奴がリーダーをやっているなと私は心の中でニヤリとした。

風呂といえばこんなこともあつた。私が部室の湯船で練習の疲れを癒している時、なにやら手の平サイズの泥が太ももの前面にべったりはりついた状態で湯船にザブザブ入ってくる奴がいる。4年生のFWの関口だ。猫背でみぞおちの辺りが凹んでいるため、ヘコミさんというあだ名がついている。

村田 「おいヘコミ。お前、すんげー泥ついてるぞ。そこ洗ったん？」

関口 「あ。祐造さん。これ落ちないんすよ。俺ジャンパーだから、リフティングのために糊スプレー塗ってるんすよ。リフターの手がすべんないように。練習のたびに塗るから、そのたびに泥がついて何層にも重なって洗ってもこすっても全然落ちないんすよ。これ。」

村田 「マジ？でも、お前それじゃ彼女に怒られるだろ。布団汚れるしさー。」

関口 「もう諦めましたよ。ラインアウトでボールをとるために一生俺はこの泥の十字架を背負って生きていくんすよ。」（と苦笑い）

文字通り泥臭い奴がいるもんだなと私は心の中でニヤリとした。信じられないくらい泥臭くてひたむきなチーム。狂気にも似た「ひたむきさ」が充満していた。それでいて、宋が練習中に仲間要求していたように、キツイ練習はコーチに「やらされる」のではなく、自分から「やる

んだ」そして「俺達はひたむきに体を張るんだ」という強い意志がチームにあった。そういうチームだった。

チームはターゲットにしていた筑波大には敗れたもの、青山学院大に勝利を挙げ、創部以来の快挙を成し遂げた。青学戦には私も出た。今でも私のベストゲームだ。思い出さずだけで嬉しい気持ちになる。チームメイトの後輩達に今でも深く感謝している。どうもありがとう。

2000年の東大ラグビー部の対抗戦は、人々から快拳と呼ばれる成績で終了した。しかし、快拳の影に隠れているが忘れてはいけない試合がある。最終戦の京都大学との定期戦には、敗けているのだ。私はその試合にも出た。負ける気はしなかったのだが負けた。快拳の後でチームにどこかフワフワした気持ちがあったのかも知れない。

試合後酒を飲みながら、宋が苦笑いで言った。「やっぱ、俺たち気持ちで油断してたすかね。満足しちゃってたって言うか。東大ラグビー部がね、勝ちたいっていう気持ちが相手より弱かったら、気持ちで負けてたら、どこにも勝てる訳ないっすよねー。あーでも、それがわかっただけで今日の試合は意味があるなー。」

私も多くのことをあのチームから学ばせてもらった。いいチームだった。

転の巻

2003年春。ワールドカッププレイヤーのプレシーズン。日本代表は苦難の道歩んだ。春の豪州合宿は1勝3敗。スーパー12のBチームクラスが相手だった。アタックは健闘してトライを奪つことはできるが、ディフェンスがはずたずたである。吹っ飛ばされて抜かれる。スピードで振り切られる。とにかく1対1が止まらない。お互いに信頼感がないから、仲間を信じられない奴が詰めたりして組織ディフェンスも機能しない。

テストマッチも連戦連敗だった。アメリカ代表に敵地で惨敗。2002

年には快勝しているロシア代表にもホームの秩父宮で惨敗。マスコミはスタッフの批判を繰り返して、向井監督の退陣の噂もでたが、現場はなんとかしようと必死だった。韓国代表には勝ったが、豪州A代表にも連敗。イングランドA代表にも連敗した。

最大の課題は1対1のタックルだった。姿勢が高い。日本代表の選手は国内では強いチームの選手ばかりだ。しかも大型な選手や攻撃が売りの選手が多い。彼らの多くは、ボールを殺すためにと高い姿勢で胸のあたりにヒットするタックルが癖になっている。確かに社会人リーグではそれでも通用するのかもしれない。だが外国人の一流の選手には通用しない。簡単に吹っ飛ばされる。次はびびって腰が引けるからスピードで振り切られる。組織で追い詰めて人数的に余ってない状況に追い込んで、最後にタックルする奴が1対1で抜かれたら組織防御も崩壊する。味方が信頼できなくなつてみんな一人よがりのプレーをし始める。一人一人の姿勢の高さが負の悪循環、ネガティブスパイラルを生み出していた。

どれだけ自分のチームが選択したシステムを信じられるか。どれだけシステムの中の自分の役割に対し責任を果たすことができるか。どれだけ仲間の信頼に応えられるか。どれだけ仲間を信頼できるか。信頼と責任が強いディフェンスを生む。

ボールの所有権を奪うことがディフェンスの目的である。ラグビーは倒れたらボールを放さなくてはいけない。だからタックルは相手を倒さなくてはならない。相手よりも自分の方が強くて胸の高さにタックルしても相手を倒せるのならそうした方がいい。ボールのコントロールが奪えるからだ。しかし、日本代表の選手の場合、相手が強いので胸の高さにタックルしても倒せない。倒すためには膝から腰にかけての低い位置にタックルしてしっかりバインドして相手の足の回転を止めなければならない。それ

ではボールがフリーになる。ボールをオフロードパスでつながれる可能性が高くなる。しかし、吹っ飛ばされてそいつに突破されるよりよっぽどマシだ。何度も吹っ飛ばされて抜かれたら、仲間に信頼してもらえなくなるからだ。

日本代表では、ボールを殺す役目は二人目の選手がやるという約束事を提案した。一人目は下に入ってボールキャリアを倒す。二人目がボールの位置にタックルする。もしくはオフロードパスのコースに体を入れる。もしくはオフロードパスを受ける相手にすかさずタックルする。二人目の仕事の概念を「キルザポップ」(ポップパスでつながれるのを防ぐ)と一言で呼ぶことを提案した。概念を一言で定義してチームで共有しておくこと練習中や試合中に復唱して確認するのに便利になるからだ。

東大ラグビー部時代に嫌というほどタックル場の砂場でこの「キルザポップ」の練習をしたのを思い出す。東大と同じ練習がジャパンでも繰り返し行われた。一人目は低く相手を倒す。二人目がボールを殺す。

特にタックルが高くて抜かれることが多かった選手には、Power Analysis を使ってすべてのタックルミスのシーンを個人的に見せた。例えば、豪州合宿の試合のグラフを見ると、難波英樹のタックル数がずば抜けて多いのだが、「ヒットしたが抜かれる」という項目の数も多かった。結構激しくコンタクトしているのだが姿勢が高くて吹っ飛ばされて抜かれるシーンがよく出てくる。まず難波を治すのが近道だと思った。

村田 「ほらナンチャン。いいヒットしてただけだねー。抜かれてるときは全部タックル高いよ。」

難波 「あー。やっぱ外人にはタックルは下っすかね。」

村田 「そうだよ。ナンチャン、学生時代ガツガツ低いタックル刺さって

たじゃん。あれだよ。あれ。俺も帝京と対戦したからよく知ってるよ。」

難波 「あ。知ってる。いたような気がする。こんなのが。東大っていっぱいいたなー。低い奴が。あの頃は自分も低くタックルしてたんですよねー。社会人になってから高くなっちゃったんすよ。次、低さを意識しますよ。」

次の試合、春のアメリカ戦から、難波の低いタックルが決まり始めた。意識一つでこんなに変われるとはさすが日本代表の選手だなと感心した。そして嬉しかった。同時に意識一つでこんなに変わることは、コーチやスタッフの役目はなんて重要なのだろうかと身の引き締まる思いがした。元々、難波は、勇気に溢れて骨惜しみしない非常にひたむきな選手だ。結局彼にはワールドカップではフランス戦しかチャンスがまわってこなくて私は非常に残念だったが、春のテストマッチでは、彼の低く激しいタックルが、何度もチームを勇気付けた。彼のタックルは、どんな言葉よりも雄弁で説得力があった。

「低くタックルすれば倒せる。」

彼に引つ張られて。チームの個人タックルの精度を示すグラフも、少しずつ少しずつ良くなっていた。

日本代表の二つめの課題は、ターンオーバーからの失点であった。攻撃中にターンオーバーを食らってトライされるケースが非常に多い。リードされていて時間がなくなってくると、焦りが生まれてくる。やけくそになって自陣から攻め始めるので余計にターンオーバーを食らってトライされるケースが増える。これが大差で負けるチームの「敗者のネガティブスパイラル」だ。日本代表の春のテストマッチは、このパターンでほぼすべて

のゲームに惨敗した。

例外は、イングラランドA代表との第一試合であった。前半から力づくで攻めてくるイングラランドA代表に対して、日本代表は粘り強いディフェンスで凌いだ。相手のラックからターンオーバーしたボールを元木由記雄がスペースにパスして広瀬佳司が裏のスペースにキックして大畑大介が拾ってそのままトライした。日本代表は、ディフェンスの粘りからボールを奪い、ターンオーバー時にできる一瞬のチャンスをものにしてトライを奪ったのだ。前半42分まで10対6でリードしていた。その試合も結局負けてしまったがスタッフの我々も選手も一番手応えを感じた試合だった。

残り20分をリードして迎えられれば焦りだすのは敵のチームだ。最低でも僅差で喰らいついた状態でいたい。点差が開くと「敗者のネガティブスパイラル」にはまってしまふ。日本代表は強い相手にも点差で喰らいついていつてまず試合を造ることが必要なのだということがはつきりわかった。

私は、「ビルディングビーバース」というゲームプランを考えた。ビルディングビーバースとは、後半の勝負どころまで「試合を造る」ためのゲームプランだ。ダムを造るビーバーのように勝利への土台を築く。ビルディングビーバースのポイントは以下。

タックルが得意な選手を先発で起用する。ディフェンス重視。

リスクを減らす。

キックを使って敵陣に行く。

陣地を取るためにキックオフとドロップアウト重視。

PKは、射程距離圏内ならばすべて狙う。

中盤から敵陣までは3次程度のショートフェイズでトライを狙う。

停滞したラックが出来たら、ドロップゴールもしくはインゴールにハイバントかグラバークック。必要以上の連続攻撃は避ける。

（なぜなら、過剰な連続攻撃はターンオーバーされて一気にトライもしくは陣地を大きく返されるリスクがあるからだ。DGが成功すれば3点。失敗しても相手のドロップアウトだから、また敵陣で攻撃を開始できる可能性が高い。インゴールへのキックは味方が押さえれば5点。相手が押さえたとしても相手のドロップアウトだ。リスクは低い。）

ディフェンスで粘ってターンオーバーからトライを狙う。敵陣にへばりつく。時間を潰す。リスクを減らす。PGとDGで細かく加点するだからキックオフとドロップアウトの受けは非常に重要なセットプレイになる。

このプランをどう考えるか。スタッフ会議に提案する前に選手の意見を探っておこう。

前回ワールドカップに出場している大久保直哉に聞いてみた。

村田 「〜というようなプランなんだけど。どう思う？直弥？」

大久保 「あー。うーん。確かに。つまらないラグビーになるかもしれないけど。それしか勝つ方法がない気がしますね。」

村田 「そつだろ。でもワールドカップで勝てば全然つまんなくないよ。最高に面白いよ。日本中ひっくりかえるよ。これいけそつじゃない？」

大久保 「うん。いけそつ。でもどれだけそれを共通イメージとしてチームで共有して、徹底して実行できるかが問題なんですよ。」

村田 「うん。そつだね。そのお膳立てをするのがスタッフの仕事だよ。向井さんに提案してみるよ。」

気をよくした私は広瀬佳司に相談した。

村田 「かくかくしかじか。どう思いますか？広瀬さん。」

広瀬 「それがチームの作戦として監督さんから提示されれば、その通り僕は動きますよ。」

アンドリユー・ミラーにも相談した。

村田 「かくかくしかじか。どう？アンディ？」

アンディ 「君の言いたいことはよく分かったけど、僕の考えは完全に正反対だな。」

村田 「え？どういうこと？」

アンディ 「相手はスコットランドだろ？キックを使ったら相手にとつてはイージーだよ。オーストラリアは暑いんだから。あいつらが疲れ果てるようにずっとボールを継続して連続攻撃するべきだよ。」

村田 「でも、それじゃこつちが先に疲れちゃうよ。あいつらのほうが個人はデカくて強いんだから。ジャパンはディフェンスではコンタクトは避けられないから体張らなきゃいけないけど、攻撃ではキックで敵陣にへばりついてPGとDGで点を稼いでコンタクトを避けるべきなんじゃないかな。」

アンディ 「そうかもしれないけど。とにかく私の意見は君の考えとは正反対だ。」

村田 「・・・。」

日本代表の司令塔のアンディと考えが正反対ではどうにもならない。私はへこんだ。がつくりきた。

いや、まてよ。確かにアンディの言うことにも一理ある。最後まで守つてばかりでは勝てないだろう。後半勝負どころでは、敵を「敗者のネガティブスパイラル」に叩き込むためにリスク覚悟で攻めねばならないときが来る。逆転の発想を試してみた。私はもう一つのゲームプラン「チャレンジ

イーグルス」も提案することにした。

チャレンジイーグルスとは、ビーバースが「造った」試合を受け継ぎ、後半の勝負どころから「勝利をもぎとる」ためのゲームプランだ。獲物を狙う鷲のようにチャンスをものにする。

チャレンジイーグルスのポイントは以下。

攻撃型の選手を戦術的交代で投入する。それがビーバーからイーグルへの戦術転換の合図。

リスクに挑戦する。

敵陣でラグビーをする。

PKは、PからGでクイック勝負。

トライを獲得まで連続攻撃する。

「ビルディングビーバース」と「チャレンジイーグルス」。春シーズン終了後、私は二つのプランをテクニカルチームに提案した。テクニカル統括の中島修二氏ともう一人のテクニカルスタッフの秋廣秀一氏も賛成してくれた。

ここで苦楽を共にしたテクニカルチームのメンバーを紹介したい。テクニカル統括の中島修二氏は元日本代表キャップ11のフランカーで、89年に日本代表がスコットランドに勝ったときのメンバーだった伝説の男だ。前回ワールドカップでもテクニカルを務めている。歌がうまい。ビートルズの歌詞を暗記していて完璧に熱唱するので外国でも大人気だ。特にラブソングが上手だ。そして笑顔が癒し系だ。私は師匠と仰いでいる。

もう一人のテクニカルスタッフの秋廣秀一氏は、NECグリーンロケッツでも7年間テクニカルをやっているテクニカルのプロ中のプロだ。選手を動かすためのツボと引き出しをたくさんもっている。元高校日本代表で日体大時代は俊足FBでスパーカートリオと呼ばれた男の一人でもある。彼の得意の宴会芸は、「オーワンダフル、チャーワンダフル」と呼ばれる荒

業で、全裸になりお椀と茶碗で股間を交互に隠しながらオブラディオブラダの節に合わせて「茶碗だぜ!」「お椀だぜ!」と歌う芸だ。私は抱腹絶倒しながら同時に尊敬した。彼はチームを盛り上げるためならそこまでやるテクニカルなのだ。NECがあれだけ強いのもうなずける。もちろん彼は宴会芸の達人であるだけではない。ラグビー映像編集の天才、いや神様である。彼はカメラとパソコンを駆使し、映像と音楽、音声と文字を一つの作品を仕上げていく。その作品は選手を勇気付け、いいイメージで試合に臨むために大いに活用された。作品に涙した選手とスタッフは数知れない。人は彼をラグビー界のスピルバークと呼ぶ。

とにかく「ビーバー」と「イーグル」は、我々3人で十分に議論し吟味し検討してから、テクニカルチームの正式提案として向井監督に提案された。この意味は非常に大きい。私の単独意見のままでは、まずチームに浸透しない。テクニカル統括の中島氏が私の意見を理解し各方面に根回ししてくれた。だからチームにすんなり採用された。苦難の道に大きく光がさした気がした。

日本代表の三つ目の課題は、ハンドリングミスが多いことだった。

9月下旬。日本代表はワールドカップ直前の沖縄合宿に突入した。しかし、まだ単純なミスが多い。秋廣氏が撮影していたコンビネーション練習のビデオで、宿舎に戻ってハンドリングエラーを数えてみた。13回もあった。ミスが起きても誰もセービングしない。パスの文句を言っている。

文句言う前にまずセービングだろう。私はテクニカルスタッフであり、コートではない。だからグラウンドでは大きな声がだせない。だから日本代表の練習に私も参加して、ミスがおきたらセービングしまくってテクニカルとしてのメッセージを選手に伝えようとした時期もあった。(日本代表に混じって練習してみたいというミーハーな気持ちが大半なのだけれど。)仮

に代表選手に怪我をさせたら誰も責任がとれないということで協会サイドから既に禁止されていた。確かにその通りなので仕方がない。どうすればセービングの大切さを選手に伝えられるだろう?

私が見たあの東大の壮絶なコンビネーションの練習をジャパンの選手達にみせてやりたかった。だけどそんなビデオは残ってない。その話を秋廣氏にすると、彼はつぶやいた。「いいこと思いついた。そういうビデオをつくろう。」私達は作業にかかった。

次の日の練習前ミーティング。選手がミーティングルームに集まってくる。前のスクリーンに桜のエンブレムと「己を知る」「日本代表の誇り」という言葉が大きな文字で映し出されていた。

定刻になり秋廣氏が前に出る。「今日はまずこのビデオを見てください。」私は再生ボタンを押した。

イングランドの国家が流れる。選手達は胸のエンブレムに手を当てて国家を歌っている。感極まって涙を流す者もいた。フェイドアウトしてオーストラリアの国家が流れる。ジャージとメロディは違うが選手達の目の光と涙と魂は同じだ。フェイドアウトして「私達が戦うのはW杯です。」「私達は国の代表です。」という言葉が浮かび上がった。そして前日の日本代表の練習の映像が映し出される。ミスが起きたシーンが次々に映し出された。ノックオン。パスミス。またノックオン。そして最後に次のような言葉の静止画像で映像が終了した。

ミスしたら処理まで

落としたらセービング。相手のミスもセービング。こぼれたらセービング。ボールは命だ。落ちたら飛込め。

自分のケツは自分で拭くものだ。失敗しても責任をとれる男は信頼される。

ジョセ・クロンフェルド

日本代表の選手達は声一つ立てずスクリーンを見つめていた。沈黙を破って向井監督が最後にまとめた。「昨日の練習ではハンドリングミスが非常に多かった。ジャパンがあんなにミスばかりしてたら勝てるもんも勝てんよ。ミスを恐れることはないけど、ミスしたら処理するところまで責任をもとう。それがミスに敵しくってということや。そうすればミスは絶対なくなる。じゃ練習に行こう。」

その日、ジャパンの練習で起こったハンドリングミスはたったの3回。ノックオンみたいなあからさまなミスらしいミスは一つもなかった。ちょっとしたパスミスで地面にボールが落ちた瞬間が3回あったが、すぐさま近くの誰かがセービングした。日本代表らしい引き締まった緊張感のある練習だった。ひとつひとつのプレーに責任をもって心を込めてプレーしているようだった。

実は、クロンフェルドが本当にそう言ったがどうかは知らない。言っていないかもしれない。なぜならあの言葉を考えたのは私だからだ。でも、たぶんセービングについて訊かれたら彼もそう言うに違いないと思う。オーブルラックスのフランカーはそんな男に違いない。ラグビーはそういうスポーツだから。信頼と責任のスポーツだ。

練習後、私は笑顔で秋廣さんとがっちり握手した。手応えを感じた。

やっと一つのチームになった。これで戦える。

結の巻

スコットランド戦前日のミーティング。「練習は試合のよつに。試合は練習のよつに。」という言葉スクリーンに掲げた。明日は練習どおり平常心

で試合に臨めばいい。練習は積み重ねてきたはず、プラスアルファの力は、ワールドカップなのだから自ずと発揮されると思った。

スコットランド戦当日のジャージ授与式。「集大成。好きな道で志を立て一芸に秀でれば望みは叶う。」という言葉掲げた。最後に秋廣さんが編集した感動ビデオが上映された。歴代の日本代表が過去のW杯で奮闘している姿が、中島みゆきの「銀の龍の背に乗って」というメロディにのせスクリーンに浮かぶ。過去の日本代表が築いてきた歴史を受け継いで今度俺たちが新しい歴史を創ろうというメッセージだ。続いてアップテンポなトランス系の踊れる曲に変わり、2003年新生ジャパンの好プレー（タックルとセービング中心）が次々に出てくる。締めはイングランドA戦のデイフェンスの粘りから奪った大畑大介のトライだ。今日もあのとときの粘りを80分間分見せて欲しい。そんな気持ちが進められていた。最後にマコーミック前日本代表キャプテンが登場した。「待っていたらチャンスは生まれません。積極的に自分からアタックしてください。次の試合じゃなくて今日の試合、力出して、自信を持って勝ってください。」滑らかな日本語ではなかったけれど、誠実な言葉だった。

日本代表対スコットランド代表戦の国家斉唱が始まった。今までの苦勞が蘇った。ジャパンの仕事が忙しくて、ラグビー選手としての自分の練習が思うようにできず精神的にきつい時期もあった。自分の言動の意図がうまく伝わらなくて誤解を受けて苦しんだときもあった。答えの見えない闇の中で挑戦をあきらめかけたこともあった。でもあきらめなかった。君が代を歌いながら、もう遣り残したことはないかと確信した。後は選手達を力いっぱい応援しよう。自然と涙がこぼれた。

辻高志が刺さる。大久保直哉が刺さる。ルーベンパーキンソンが刺さる。伊藤剛臣が刺さる。こぼれ球を網野正大がセービングする。そのたびに私

は絶叫した。「いいぞージャパン！頑張れ！」途中まではほぼシナリオ通りだった。ビーバー達が粘り抜いて試合を造った。ミラーが投入されてイーグルになったジャパンはすかさずショートフェイズの一発サインプレーでワントライを奪い返した。試合の終盤までどっちが勝つかわからない見事な試合だった。しかし、あと一歩及ばなかった。大金星を逃した。負けてめちやくちや悔しかった。

試合後、街ですれ違うオーストラリア人にもスコットランド人にも「Well-done, JAPAN, You play very well. It was very close.」と言われた。負けて悔しいけど、ちよっと嬉しい。

パプでスコットランド代表のキャプテンのブライアンレッドパスがいたので話しかけた。

村田 「今日はおめでとございます。レッドパスさん。ぼくは日本代表でテクニカルスタッフをしている祐造と言います。だからあなたのことは良く知っています。よろしくね。」

ブライアン「やあ 祐造。今日、日本はよくやったね。本当に勝つのが難しかった。今日は呑もうぜ」

村田 「スコットランドはカバードィフェンスが厚くて精神的にタフでひたむきなチームで本当に強かった。私はスコットランドのラグビー大好きです。もう少しのところまでいったのに。非常に残念です。ところであなたミスタービーンに似ていますよね。」

ブライアン「(ちよっと怒った顔をしてから大爆笑)このやるー。よくも言ってくれたな。シヨークのお礼にこれをプレゼントするよ。今日の試合の記念のピンバッジだ。」

村田 「うわーありがとうございます。いい記念になります。とても嬉しいです。」

ブライアン「OK。祐造。次の試合の幸運を祈るよ」

日本代表対フランス代表戦。ハーフタイムのスコアボードを私は一生忘れないだろう。FRA 20-16 JPN。日本が世界を相手に立派に戦っていた。眺めていたらまた涙が溢れた。後半開始早々栗原徹がPGを決めて20対19になったときは狂喜乱舞した。スコアボードを指差して「見る！あれを見る！なんだあれは！」と絶叫した。あまりに暴れすぎて記録用に手にしていたノートPCをお手玉して危うく落つことすところだった。近くのおーストラリア人のおばちゃんがお手玉を真似して微笑んだ。その隣のおじちゃんが私を指さしてゲラゲラ笑っていた。健闘したものの結果は51対29。試合後さっきのおばちゃんとおじちゃんが笑顔で握手を求めてきた。「Well-done Again, JAPAN team, You play very very well. It's really amazing!」

東大ラグビー部の同期からも応援のメールが来た。「なんか日本代表って東大みたいだね。頑張ってタツクル。勝てなかったけど人々は感動したと思うよ。」

結局、その後のフィジー戦、アメリカ戦にも連敗した。終わってみれば0勝4敗。日本ラグビーの総合力がやはりまだ足りないのだと思った。世界の背中が見えたと向井監督は総括していた。

最終戦の翌日の夜、日本代表チームはシドニーのスポーツバーで呑んでいた。私もへべれけに酔っ払った。わたしが買ってきた直径60センチのジャンボアフロのかつらを箕内拓郎がかぶっていた。みんなビールを片手に踊っていた。私達は肩を組んで「上を向いて歩こう」を歌った。「上を向いて歩こう。涙がこぼれないように。上を向いて歩こう。」

大久保「祐造さん。おつかれ。いい仕事したと思うよ。どうもありがとうございます。」

村田 「おつかれ直哉、ナイスタックル。あんたすげーよ。こっちこそどうもありがとう。」

大久保 「今度はラグビー場で会おうよ。グラウンドで。」

村田 「いいねー。スクラム対面でガンとばして向かい合いたいよ。サントリー戦出られるように帰ったら猛練習するよ。あははは。」

アンディ 「ユウゾウ。前に僕達、日本の戦術について議論したことがあるのを覚えてる？」

村田 「うん。覚えてるよ。」

アンディ 「あれ。やっぱりユウゾウの方が正解だったかもしれないよ。ワールドカップ4試合やってみただけど、相手は強くて本当にアタックのチャンス少なかった。トライとるのは本当に難しい。ドロップゴールとペナルティゴールはやっぱりすごく大事。」

村田 「うん、うん。ありがとうアンディ。でもすごくいい試合できたと思うよ。フイジー戦のドロップゴールすごかったよ。時間が止まったみたいだった。あのDGは世界記録じゃないの？感動したよ。」

アンディ 「うん。ありがとう。」

村田 「アンディ、ワールドカップ楽しんだ？」

アンディ 「もちろんだよ。ユウゾウは？」

村田 「うん。最高だ。」

エピソード

日本代表や三洋電機の選手達と呑みに行ったり、飯を食ったり、お茶をしているときに、私は、よく東大ラグビー部のことを訊かれる。試合をし

たことのある奴は「いやー東大と試合するのは嫌だったなー。負ける気はしないんだけどね。でもタックル低いし必死なんだもん。怪我するよ。こっちは。」とみんな顔をしかめる。すると私は「まあねー。東大の魂はタックルとセービングだよ。ひたむきさと泥臭さ。」と答えることにしている。そして次のような東大の数々の伝説を紹介する。

「対面殺して俺も死ぬ！」吉岡先輩

「負けて泣くなら勝って死ぬ」青山先輩

「お前ら試合前に俺に遺書出せ」水上コーチ

「東大のプレースキッカーは個人で毎日夜遅くまで練習してた。しかもボールを拾い集めるときは、タックルの姿勢で膝を曲げて低く腰を落として一歩一歩前進しながらインゴールまで行くんだぜ。他に誰もいないグラウンドで一人ぼっちだよ。」佐分利先輩

「いいかFW。『頑張る』っていうのはよー、最初の10mダッシュして最後の10mもダッシュするっていうことなんだよ。ポイントからポイントの移動はそういう気持ちで走るんだよ。それが、FWが『頑張る』ってことなんだよ。BKが最後トライしたときにはFW全員が塊でインゴールになだれ込むぐらい『頑張る』走ってみる！」（この後選手を蹴飛ばす。）橋本コーチ

「東大のFWはコンピの最中によくインゴールでゲロを吐く」

「試合中はスクラムクラウチのときにプロップとフッカーがよくカラゲロを吐いている。」

みんなゲラゲラ笑う。私も上機嫌になる。東大ラグビー部の思い出は尽きない。誰もがひたむきにラグビーに取り組んでいたからだろう。

ワールドカップの日本代表。対抗戦の東大ラグビー部。相似図形の窓か

ら見えたもの。「ひたむきに。ひとつひとつ心をこめて。タックルとセービング。」私は自分のラグビー哲学が見えた気がした。日本ラグビーが世界で生きる道が見えた気がした。

日本代表のテクニカルとしての私の任務は終わりました。タックルとセービング。セットプレイの確保。合理的な戦術。これらが周到に準備できれば日本代表は世界に通用することが分かりました。

現在、私の業務は、ラグビー分析ソフト PowerAnalysis を日本ラグビーの分析標準ツールにして各チームに普及していくことです。日本ラグビー協会が、トップリーグ、有力大学の全試合でタックルとセービングの個人データを管理・利用・公開して日本ラグビーの強化に役立てていくように現在、企画書を書いています。そうやってラグビーに恩返しすることが、今までラグビーを通じて得た経験、恩師、仲間、同期、先輩、後輩達、そして家族への恩返しになっていけばいいなと思います。この場を借りて皆様にお礼を述べたいです。どうもありがとうございます。

そして今、私はいちラグビー選手に戻り、三洋電機ワイルドナイツのグラウンドで自分自身の向上を求めて楯円球を追い駆けています。

12月27日、NECのBと練習試合があった。次のサントリー戦に向けてのセレクションマッチだ。試合前後にNEC所属の日本代表関係者に声をかけられた。

試合前。

久富「祐造さん！今日スタメンじゃないですか！メンバー表見て驚きましたよ。熱いプレーを見せてくださいよ。」

試合後。

浅野「楽しみにしてたんすよ。今日。祐造さんのプレイ見れると思って。」

網野「頑張ってたねー祐造。三洋いいチームじゃん。」

箕内「泥にまみれて仕事しすぎっすよ。祐造さん。どこにいるかわかりませんでしたよ。」

秋廣「いやあー。ウチのロックの膝に思いっきり刺さってたもんね。ガツーンと！あれ、壊されたかと思ったもん。」

中島「祐造の課題はアタックだなー。もっと中間走は力を抜いてメリハリつけようよ。もっとフロンカーは狙わなきゃ。でも確かにディフェンスはいい。目立ってた。」

辻「祐造さんも熱いっすね！」

対戦相手にも友達がたくさんいるのは、嬉しいことだ。自分のラグビーにまだ伸びしろがあるのも嬉しい。

もっとうまくなりたい。もっとうまくなれる。

タックル。ボールが落ちたらセービング。ひたむきに。ひとつひとつ心をこめて。

ラグビーがすぎだ。